

◇江戸遺跡研究会第97回例会は、2004年9月22日(水)午後6時30分より江戸東京博物館学習室に◇  
◇て行われ、松原典明氏より、以下の内容が報告されました。◇

## 近世大名家墓所と奥絵師狩野家墓所の調査概要 —池上本門寺の調査事例を中心として—

松原 典明

(佛教石造文化財研究所)

### 1 はじめに

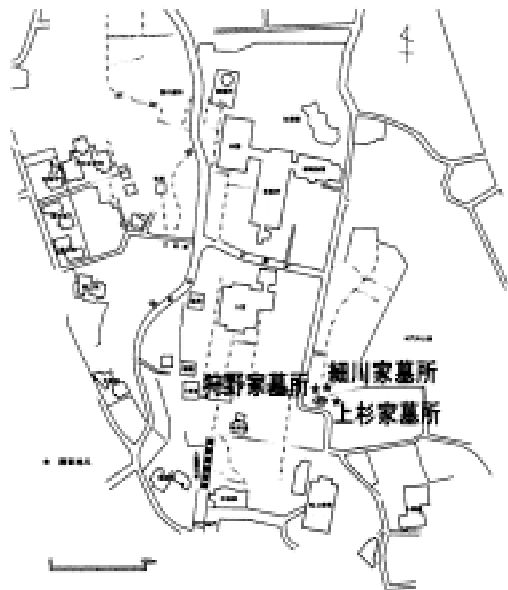
日蓮宗大本山池上本門寺(山号:長栄山・院号:大國院と号す)は、日蓮聖人(以下敬称略)立教開宗の慶賛事業の一つとして、重要文化財(昭和32年指定:明治44年特別保護建造物に指定)指定されている五重塔の保存修復を行った。今回の調査は、この五重塔の周辺整備に伴い、出羽米澤藩上杉家・圓光院殿日仙榮寿大姉と肥後熊本藩細川家・清高院殿・高正院殿の墓所と狩野養朴常信・如川周信・晴川院養信の墓所の調査を行った。



第1図 池上本門寺の位置

### 2 上杉家墓所の調査

① 圓光院殿日仙榮寿大姉について:圓光院殿日仙榮寿大姉は、御三家紀伊藩の第2代藩主徳川光貞の娘で、万治3年(1660)7月10日の誕生。幼少は、禰為姫と称していたが、のち榮姫と改めている。延宝6年6月1日、19歳で米沢藩の第4代藩主上杉綱憲の正室に迎えられた。夫・上杉綱憲は、幕府高官吉良上野介義央の子で、養子として迎えられ第4代の藩主を継い



第2図 調査地点の位置

だ人物である。綱憲は、宝永元（1704）年6月2日、42歳で逝去し、これにより正室栄姫は圓光院と称するようになった。しかし、その栄姫も翌宝永2年閏4月26日に疱瘡のため46歳で亡くなってしまった。栄姫の遺体は本門寺に埋葬され、その位牌は紀伊藩歴代の夫人・姫君らの菩提を弔う和歌山の報恩寺と、上杉家の菩提所で内室・子女の墓所のある米沢の林泉寺にそれぞれ安置された。その後、本門寺では百箇日の法要が執り行われ墓石の造営が行われたことが記録として残っている。

② 墓構造の特徴：上部構造は、基台・基壇・墓塔から形成されている。下部構造の特徴は、約7m四方に及ぶ上部構造の基台の範囲を超える10m四方を地下を1m掘り下げ、厚さ5cm内外の砂利層と粘土層の交互による版築によって基台上面まで構築している。主体部は、版築の上面から掘り込み間知石を長方形に3段組み石室状の室が造られている。また、版築以前の掘り方面には規則的に並んだピット群が確認できた。このピット群の性格については測量基準や足場の設計基準的な要素があるように推測される。

③ 埋葬主体部：埋葬主体部は、間知石3段積みの石室に刳り貫きの組合わせ石櫃と副室的な空間を確認した。石櫃内は、白磁の有蓋壺大小のほか錠前、鍵、木片が確認でき、木箱に丁寧に蔵骨器が埋納されたことが推測できた。副室では錠前、幡飾り金具、釘類、灰、炭化物が確認できた。なお、副室出土遺物は、石櫃側面に付着した錆の痕跡と考え合わせると錠前のついた木製箱などに納めてあったものと思われる。

④ 出土遺物：大少同形態の白磁の有蓋壺2口は、大きいほうが約一尺、小さいほうが約五分の総高を有す。器肌は、貫乳が細かに入り肥前焼きの特徴を示すものである。類例は、徳島市慈時光寺賀嶋主水墓出土や、福島県の白河藩主松平直矩墓出土の遺物に類似している。特に白河藩主墓出土品はセット関係も酷似している。この他、葬送に使用されたのか幡頭の懸鐙部と幡頭縁端飾り金具が出土している。

### 3 細川家墓所の調査

細川家墓所は、圓光院殿墓の北西側に位置し、五重塔の北東に隣接した300㎡に及ぶ広さを有した廟所である。今回の調査は、清高院殿妙秀日圓大姉墓と高正院殿妙泉日流大姉墓の調査を行った。清高院殿妙秀日圓大姉は、肥後熊本藩二代藩主（細川四代）光尚の側室で同三代藩主（細川五代）綱利生母および新田支藩祖細川利重の生母でもあり寶永7（1710）年3月29日に94歳で逝去されている。清高院殿墓は、塔の方向を意識して西を正面に造立されているが、この墓の西側前面には高正院殿妙泉日流大姉墓が位置している。この清高院殿墓は、当初、承教寺（本門寺末、港区高輪）に葬られ、明治43年に現在の清高院殿墓の西に改葬されたことが記録として残っている。この高正院殿妙泉日流大姉は、熊本新田支藩祖細川利重の側室で、熊本藩二代宣紀、新田支藩二代利昌の生母で享保六（1721）年7月25日に69歳で逝去されている。

① 墓構造 清高院殿墓：上部構造は、基台、基壇、墓塔から成る。圓光院殿墓同様、遺存して

いる部材から基台には玉垣が廻り、笠付の門扉が付く構造をしており、基台前面には手水鉢と燈籠一対あり、さらに調査で明らかになったことは東西18m、南北13mの墓を囲む周溝があり空掘りと思われるが二重の墓域構造になっていたと思われる。また、礎石の確認から外周にも門扉があったと思われる。

下部構造は、旧地表から南北3.5東西5mを掘り下げ、3段組の間知石により石室を築き、基台内部まで版築構造で構築している。主体部は、2m×1.5mで3段の間知石が積まれ漆喰槨の内側に板枠が入りさらに漆喰槨が木棺を覆う三重構造であった。また、漆喰槨は木炭片が交互に詰められた構造で丁寧な埋葬が行われていた。

② 出土遺物：木棺内出土品として、漆工品、鼈甲製品（九曜紋と桜紋入り笄）、銅銭（六道銭）などが主な副葬品である。漆工品を細かに見ると①籬菊蒔絵料紙箱②菊蒔絵乱箱③南天蒔絵乱箱④桜九曜紋透梅若松蒔絵脇息である。脇息には引き出しが3つ設えてあり引き出し内部に、上下に段に香木と銀製の香道具、人形類が納めてあり、他の引き出しには重香合2合を収納する香箱が収納されていた。漆器のうち特に籬菊蒔絵料紙箱にみられる高蒔絵、平蒔絵、切金、極付、彫金象眼などの素材や技法はすべて、寛永14（1637）年に三代将軍徳川家光が娘の千代姫の婚礼に際し制作させた「初音調度」（国宝、徳川美術館蔵）に使用されているものとされている。報告書刊行後の調査ではこの料紙箱内には経文が納められていたことが明らかになった。六道銭は、ご遺体の手に布で包まれ納められたと思われる。いわゆる六道銭と思われるが銭文が珍しく南妙法蓮華経の題目が鋳出されていた。

#### 4 高正院殿墓の調査

移設改葬墓（明治43-1901年に当寺末・港区承教寺から改装）である。上部構造は基台が省略されていると思われる。下部構造は、現在の地山に方形の土坑を穿ち、その中に間知石を方形に3段に積んだ石室で、その中央に甕棺を埋葬する形式がとられていた。高正院殿墓からは数珠玉と銭貨片を確認している

#### 5 狩野家墓所の調査

今回調査の狩野家は、江戸の絵師の狩野家のうち「木挽町狩野家」と呼ばれる家柄の3（2・3・9）代の墓所の調査である。墓所の特徴は、3基とも亀形の台座に圭頭形の身を載せた亀趺墓である。

##### ①狩野養朴常信

上部構造：3段の基台に亀趺墓が載る。

下部構造：埋葬主体部は、基台下2mまで2m四方に掘り下げ、木棺枠→木棺→漆喰込め→漆喰で覆う。木棺枠の外側はロームブロックと木炭を交互に充填。木棺は胡座

出土遺物：煙管箱、水晶製・木製軸頭、模造刀が主である。

## ②狩野如川周信

上部構造は1段の基台の上に亀趺墓が載る形式である。

下部構造：隣接する細川家の墓所の版築土を切り込み約2.3m地下に埋葬主体部がある。主体部の大きさは1.4m四方で直接木棺がおかれ周囲にロームブロック土が充填され木棺直上に凝灰岩質の蓋石3枚がおかれたものと思われる。蓋石より上層は、砂利層とロームブロック土層が交互に版築されていた。

出土遺物：漆塗筆箱・模造刀・漆塗香筆筒・銅銭（寛永通宝15枚）・緑色漆塗煙草入・水晶製眼鏡・黒漆塗印籠小箱などが主な遺物である。特に筆箱と香筆筒の内容物には注目すべき点がある。

## ③狩野晴川院養信

上部構造：1段の基台の上に亀趺墓が載る形式であり、周信墓に隣接する。なお、養信墓は、周信墓の上部構造を若干移動させて構築しているものと思われる。

養信の業績は、江戸城の障壁画をはじめ奥絵師として注目すべきものは多いが、墓所と墓構造は、簡単な甕棺直葬で、副葬品は全く確認できなかった。

## 6 おわりに

以上、最後に若干調査成果から気づいたことについて触れてまとめたい。

圓光院殿は、火葬後埋葬されているが、茶毘と埋葬とは時間差があり、文献の記録からは約4月に逝去の後、百箇日の法要を経て8月に埋葬が行われて葬儀から埋葬までの約3ヶ月の間に石材が準備され墓の造営が行われたことが明らかになった。また、出土遺物からは、青銅製飾り金具、錠前や、幡を装飾する懸鐙と端飾り金具などが出土しているが、いずれも被熱しており、葬送に伴い荘厳のための幡なども含め茶毘にふされたものと思われる。茶毘後は、灰も含めて全てが集骨と共に集められ、木製錠前付箱におさめられたと思われる。

続いて、塔の形式について若干触れてみる。本門寺内における大名家墓の塔形式は宝篋印塔、五輪等、笠付角柱塔などの形態が認められるが、今回調査した細川家、上杉家の墓の形式は寶塔形式である。山内における宝塔形式の墓を「家」ごとに示すと紀伊紀州藩徳川家・紀州徳川宗家、因幡鳥取池田家・出羽山形藩上杉家・肥後熊本藩細川家・伊予西条藩松平家・讃岐高松藩松平家に限られる。塔形式の採用においては、肥後熊本藩細川家以外は紀州藩徳川家との「家」との繋がりが大きな要因となったことが推測でき、承応2（1653）年に造立された養珠院の塔形式が基本形となったと思われる。一方細川家の宝塔形式は、山内においては元禄六（1693）年の本空院殿墓の形式を基本として、徳川家の松寿院殿墓との折衷形式的な要素を清高院殿墓に取り入れたものと考えられる。反花座の上に基礎を取り入れ、塔身の上下にナゲシ状の突起（宝塔の高欄部の表現？）を表現する部分が徳川家形式を真似たものであろうし、笠の部分は宝篋印塔の笠変形のような形態をしている。しかし、この推測は、本門寺山内における大名家墓の形態の変化を示すものであり、御府内におけるその他の大名家墓との比較検討が今後の課題となろう。

江戸遺跡研究会編

# 『江戸の祈り 信仰と願望』 刊行のお知らせ

吉川弘文館

都市江戸に暮らす人々は、生活の平安・向上を願い、現世利益を求め、さまざまな宗教活動を行っていた。発掘された遺構・遺物をもとに、修験道、地鎮め、胞衣納め、マジナイ・占い・祈祷、墓標、鎮守、富士講など、多彩な宗教儀礼や民間信仰・習俗の実態を解明。そこに秘められた都市民の行動、精神のあり方を探り、新たな近世社会像を描き出す。

## 主な内容

はしがき	寺島孝一
第15回大会『江戸の祈り』によせて	橋口定志
近世修験の考古学	時枝 務
武甲山山頂遺跡の調査	小林 茂・深田芳行
江戸の地鎮と埋納	関口慶久
礫石経埋納と地鎮・鎮壇	有富由紀子
江戸のマジナイ	高橋典子
「胞衣納め」をめぐる	土井義夫
墓標研究の展望	田中藤司
解き放たれた大名屋敷内鎮守と地域住民	吉田正高
富士講の成立と展開	植松章八
『江戸の祈り』成果と課題	橋口定志
あとがき	古泉 弘

装丁 A5判・上製・カバー装

ページ 314頁

定価 6,930円

---

## 第98回例会のご案内

---

日 時：2004年11月17日（水）18:30～

内 容：小林 風氏（専修大学大学院）

「近世後期江戸東郊地域の下肥流通

—天保・弘化期の下肥値下げ願申合議定を中心に—」

会 場：江戸東京博物館 第2学習室

（大階段北側の通路を東に進み、駐車場の脇を直進し、左側の夜間入口より入る）

交 通：J R 総武線両国駅西口改札 徒歩3分

都営大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：江戸東京博物館

03-3626-9917（小林）

東京大学埋蔵文化財調査室

03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>

